

安西軍策卷第三

陶入道嚴島渡海並合戦事

弘治元年九月陶入道二萬七千餘騎ヲ引卒シ山口ヲ打立岩國永興寺ニ陣ヲ居軍評定シケルニ弘中三河守云ケルハ廿日市ノ櫻尾草津ノ城ヲ責落吉田ヘ押寄ナハ忽元就ヲ討亡シ事不可廻時日嚴島ヘ渡海セハ元就元來小勢ナレハ於彼島安否ノ合戦シテ雌雄ヲ決ントノ計ナルヘシ兎角嚴島渡海ハ思止リ給ヘト再三申ケレ共陶入道元就朝臣ノ謀畧ヲ不知嚴島渡海ト相定九月中旬七百餘艘ノ兵船ニ収乗嚴島ヘ渡リケリ弘中ハ全薑智慮淺クシテ元就ノ謀ノ中ニ墮ル事大内陶ノ滅亡此時也ト知ナカラ不及カ二日後レテ押渡ル三萬及ノ勢ナレハ嚴島寸土尺地ノ明間ナク全薑ハ塔ノ岡ニ本陣ヲ居タリ角テ三浦越中守カ

口ノ毎頁に記し

安西軍策卷第三

一

一 現存 古本

元就軍記の名著『陰徳記』

の欠陥を補う貴重資料

限定三百部復刻 (番号入)

# 安西軍策

付毛利元就記

マツノ書店



## 『陰徳記』の原資料『安西軍策』の 覆刻を喜ぶ

島根女子短大学長 藤岡 大拙

本書は中国地方の戦国時代を描いた軍記物の一つである。巻第一の大内義興が永正五年（一五〇八）『流れ公方』足利義植<sup>よしたけ</sup>を奉じて上洛する件<sup>くだり</sup>から、巻第七の慶長の役（一五九七）で渡海した吉川広家の活躍まで、およそ百年間を記述したものである。著者も成立年代も不詳であるが、毛利藩の編纂した『新裁軍記』（マツノ書店刊）によると、「安西軍策は岩国の人<sup>あわわ</sup>著せり」とあるので、著者は岩国吉川藩の家臣の誰かであろう。そういえば、全体に毛利氏や支藩吉川氏の記述が中心で、大内や尼子などに関する記事は比較的簡略である。

注目すべきは、本書が中国地方戦国史のもっとも詳しい軍記物『陰徳記』（マツノ書店刊）の原資料になっていることである。従って、本書は『陰徳記』の成立した万治三年（一六六〇）以前に完成していたことは確実である。『陰徳記』の著者香川正矩は、本書の記述をほとんどとり入れたうえで、内容を追加し、中国の故事を引用したりして文学的修飾を行い、大きく膨らませた。従って、『陰徳記』は正矩の子宣阿が著した『陰徳太平記』とともに、物語性にとみ、読んで面白いのだが、反面、核心がぼけたり史実から遠ざかるなどの欠点も否めない。その点、本書は冗長な修飾がないほど、史実により近い記述であり、『陰徳記』の欠点を補う貴重な資料といえることができる。

このように貴重な軍記物である本書は、明治十五年（一八八二）史籍集覧に収録され公刊さ

れた。明治三十五年改訂史籍集覧にも収録され、以後、再版されたこともあったが、刊行部数が少なかったためか、現在では研究者の手にも入りかねるほどの稀覯本になっている。今回、マツノ書店から覆刻のはこびとなったのは、そうした意味でたいへん大きな意義があり、欣快の至りである。

本書は一般に「あんざい」軍策と訓まれているが、「安西」が安芸と鎮西の意であるとするなら「あんざい」または「あんせい」と訓むべきだろう。しかし、本書において鎮西に関する記述は、巻第六に載るだけで、全体としては中国地方の記述が圧倒的である。もし、「西国を安んずる」という意ならば、「あんざい」又は「あんさい」のほうがいいだろう。なお、『続群書類従』二十三（上）に「安西軍略」という類似の名前をもつ、毛利氏を中心とする軍記物が収録されている。記述は簡略でかなりの誤字や錯簡があるが、本書と記述の部分的共通性が認められる。

### 「安西軍策」について

■本書の原本は現存せず、著者も不明です。刊本は明治十五年版「史籍集覧」と明治三十三年版「改訂史籍集覧」に入っています。この場合の「改訂」とは叢書全体の構成を改めたという意味に過ぎず、「安西軍策」についていえば、明治十五年版も明治三十三年版も、帝国（東京）図書館にある全く同じ写本から活字化さ

れた別の本です。

■両書ともこのシリーズの出版人・近藤瓶城が校訂しています。このたび「史籍集覧」から復刻するのは、以下の理由からです。

- ①小社がこの刊本のみを二セット所有している。
  - ②両書を比較すると内容はほとんど変わらず、文字の大きさや行間のバランスはこちらの方が良い。
- なお山口県文書館所蔵の写しは、これら刊本に比べ脱落があります。

■体 裁 A5判 四九〇頁

クロス装製・箱入

■定 価 八千円（千450円）

■予約定価 六千円（千450円）

■特価締切 平成十二年七月末日

限定三百部（番号入）

▼今回は本誌の目録による古書のご注文と同時に発送すべく、すでに本書は完成し、限定番号も記入して発送待ちの状態です。つまり「特価期間中」でもご注文が三百部を超えた場合どうにもなりません。今すぐご注文下さい。

▼「二点セット特価」は申込書に書いてあります。